

貧乏神

昔々、泊野(とつまの)のあるところに、夫婦二人が貧しい暮らしをしていました。ある年の暮れ、このままでは暮らしがなりたない、よそでやり直そうと村を出て行くことにしました。行き先は菱刈です。菱刈は米どころと聞いていたので、そこなら食うには困らんだろうと思ったのです。

二人はわずかばかりの荷物を持って、舟の渡し場に行きました。昔は、橋がなかったため、川内川の反対側に行くには渡し舟に乗るのです。舟の船頭は顔見知りでした。

「貧乏暮らしはもうたくさんだ、菱刈に行つてやり直すつもりじゃ」と話すと、船頭は、「菱刈には行かん方がよかど」と言います。不審に思つて、理由を聞くと、「先ほどお客をひとり、向こう岸に渡したんだが、その人はお前の家のもんで、菱刈に行くと言つておつた。あれは貧乏神じゃつど」と言うので、夫婦は驚いて顔を見合わせました。船頭はさらに次のように言いました。「我が家に戻つたほうがよかど。どこ



に行つても、貧乏神は先回りすつてね」

夫婦は、そうだなと思ひ家に帰りました。家の中は足の踏み場もないほど、散らかつていました。いつもそういう状態で、ろくに掃除もせず、汚かつたのです。二人はどちらからということもなく、片付け始めました。一箇所きれいになると、不思議なものではかのところも気になつて、それから、明けても暮れても掃除ばかりしておりました。

数日後、菱刈に行つたはずの貧乏神が戻ってきました。しかし、家の前で「確かにここなんじゃが」と首をかしげました。そして、しばらく家の様子をうかがつていましたが、「家の中も外も見違えるようにきれいになつておる。わしは今日から福の神じゃ」とにっこり笑つて、家の中にはいつていきました。

それからというもの、夫婦の暮らしは豊かになつていったそうです。

貧乏神も福の神も同じ人であるそうで、家の暮らし向きというのはその心がけ次第で良くも悪くもなるという言い伝えです。



(原話さつま町宮之城 崎野弥七)

文/有馬英子 絵/二石綱夫